

— Translation —

医師としてのロバート・ブリッジズ (1)

田邊久美子

Robert Bridges as Physician (1)

Kumiko TANABE

Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1, Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan
(Received October 16; Accepted December 1, 2020)

Abstract This is the Japanese translation of Chapters 5 in *Robert Bridges: A Biography* (Oxford University Press, 1992), written by Dr. Catherine Phillips, who is a fellow of Downing College, University of Cambridge. She gave me the permission to translate the book into Japanese, and I appreciate all her kind assistance while I was a visiting scholar there in 2014 and 2019.

This book, especially Chapter 5 and 6, reveals the aspect of Bridges as doctor though he is generally acknowledged as poet. In this regard, Dr. Phillips is the predecessor of the recent trends of literary and cultural studies on the nineteenth century England focusing on the relationship between literature, medicine and science, and her minute research on the medical practice in the nineteenth century England in this book is worthy of note to those who are interested in medicine at that time as well.

Key words — 19th century England, medical training, English literature, Robert Bridges, G. M. Hopkins



Robert Bridges
(a freely licensed photograph from Wikipedia)

略号および書式 (表記) について

原注に記載された引用文献の略号について以下に明示する。脚注は原注のまま表記および翻訳した。なお、改行 (1マス空ける) などの書式については、一般的な和文書式と異なる箇所がある

が、著者の意図を尊重し、原文の英文書式をもとにしているの、ご理解いただきたい。

LB *The Selected Letters of Robert Bridges with the Correspondence of Robert Bridges and Lionel Muirhead*, ed. Donald Stanford, 2 Vols.

(Neward, 1983, 1984).

LI *The Letters of Gerard Manley Hopkins to Robert Bridges*, ed. C.C. Abbott

(London: Oxford UP, 1970).

LIII *Further Letters of Gerard Manley Hopkins*, ed. C.C. Abbott (London: Oxford UP, 1970).

Bridges Family Papers ブリッジズ家によって保管されている文書.

BP Bridges Papers, Bodleian Library, Oxford.

DNB *Dictionary of National Biography*

第5章 医学研修 (1869年—1874年)

聖バーソロミュー病院は1123年に設立された慈善病院である。ブリッジズの時代には、その病院は中央広場の周りに建設された4つの大きな建物で構成されていた。その建物のうち3棟は、約700のベッド、4番目の管理事務所、宴会場のある病棟であった。中央棟を取り囲む外周と狭い中庭の向かい側には、図書館、薬局、救急病棟と学生を教えるための講義棟があった。

19世紀後半、イングランドでは、一般科学教育の発展の結果として、またフランスとドイツにおける進歩の影響を受けて、医療行為の科学性が目覚ましく向上した。¹ このことにより、医師がどうあるべきかという概念に変化が起こった。新米医師は幅広く人文学の教育を受けた立派な紳士であるべきで、その後、医師としての職業の技術的なスキルにだんだんと精通していくようになるという古い考え方に代わって、大衆は自分たちを治療する資格が十分でない人から守られる必要があるという考えが発展した。新たな医学生は医療行為を初めて行う日から「安全な」医師でなくてはならないのだ。学生が習得しなければならない技術の情報は急速に増加していった。ブリッジズは後に、当時「細胞病理学と顕微鏡の時代」であ

り、「顕微鏡の使用に関する無数の本」が書かれ、「全ての学生は組織の薄片を切除し染色していた」と回想した。² 化学分析の重要性についての認識も高まっていった。1867年に医学評議会は、カリキュラムの制定について決定したが、それは組織的に編成され理論武装したシラバスとなり、その完成には4年を要することとなった。この改革を先導した主な人物はヘンリー・アクランド卿であり、彼はオックスフォードにおいて科学への関心を高めることに尽力を尽くしたのであった。

第1冬学期にブリッジズは生理学、科学、解剖学を学んだが、これらの科目は全て医学に必要な予備知識であると考えられていた。ホプキンスは1869年10月20日にブリッジズが猛勉強のため夕食の誘いを断り続けていると母に報告した。³ 週に3日間、ブリッジズは午前9時15分から科学の講義を受けたはずで、週に4日間は10時15分から生理学の講義があり、その直後に骨格と解剖についての授業があった。大学要覧は以下のように要請している。

1年生は全員、午前の講義の直後に、解剖の授業に出席して勤勉でなければならない。午前の講義では、学生は骨格に関する科目で実習助手の指導を受けた後、解剖体の部位が学生に分配されることになる。実習助手は、この目的のためにクラス分けをするのである。

12時30分から1時30分までの時間は、学生は解剖に従事していないため、死体解剖と外科手術を受ける外来患者に立ち会うべきである。

1時30分に学生は病棟に在るべきである。そして特に、この第1冬学期には外科病棟に在るべきである。

水曜と土曜の1時半に、学生は様々な外科手術が行われるのを見るために、公開手術室

¹ 薬物と医学研修の変化についての有益な解説に関しては、Charles Newmanの*The Evolution of Medical Education in the Nineteenth Century* (1957)と、Herbert Dingle編、*A Century of Science 1851-1951*所収のE. Ashworth Underwoodによる'Medicine, Surgery and their Scientific Development'を参照。

² Medical Lecture, fo. 2.

³ LIII, 107.

に同席すべきである。そして、その病棟の同室において、木曜の1時半に、学生は患者が外科で診察を受ける際に同席することになっている。⁴

医学生は第2夏学期においても、引き続き、死体解剖および外来患者のため、医療や外科の診療所において立ち会わなければならなかった。月曜と木曜の午後2時から4時まで顕微鏡を使用する組織分析の授業があり、熱い天候下で死体を保存する問題があったので、夏には解剖の授業は行われず、その代わりに1年生は化学実験室で作業を行った。第1学期に学生に推奨される選択科目と考えられていた臨床医学と外科は、医療行為が重視されるようになってきたため、必修科目になった。午前の講義は「病気の治療に使用される全ての薬物を考察すること」についてだった。病院外で働く多くの医師たちは、自分たちが使用する薬を用意しなければならなかったので、週に3回午前中に植物学の講義がスケジュールに含まれ、時にはロンドンの都市化がまだ進んでいない地域への「植物採集の小旅行」が追加されることもあった。その際には病院の薬剤師の1人が学生を引率して、学生が採集した植物の確認を行っていた。ブリッジズは以前から花の色を賛美していたが、これにより、植物についてさらに詳しく知ようになった。ブリッジズがオックスフォード近郊に住み、年を重ねると、地元の植物に対する彼の知識は「伝説」となった。⁵ブリッジズはまた、多くの彼の詩に植物を列挙したり、特定の植物の習性を詳細に描写したりした。聖バーソロミュー病院の資料館には、学生が学ばねばならない一般植物標本集、および、薬用植物や果実のコレクションがあった。

ブリッジズが王立外科大学の博物館でも時間を費やしていたことは明らかだが、その博物館ではダーウィンがパタゴニアで収集した化石も展示さ

れていた。このような化石は、もちろん、聖書と科学、双方の視点から創造に関する解釈が議論された時代に重要なものであり、ブリッジズもこの問題について考えたことであろう。20世紀初頭に書かれた詩、「冬の喜び」において、ブリッジズはこれらの化石について述べ、その地質学と化石の記録が、「地球の石版に、神の指によって太古の昔に刻まれた唯一の掟」であると語っている。

ブリッジズが医学研修においてよく使用した本は、彼の宗教的信念に深く影響を与えたようだ。科学と神学思想の関係が議論となった時代に書かれたそれらの本は、幾分おざなりなところがあるにせよ、科学をさらに幅広い形而上学的なコンテクストの中に置くことにより、この事実を反映している。例えば、J. P. クックは『化学物理学の要素』において、科学の法則を「自然に顕現した神の思想」とし、力を「神の無限の意思の不変の行為」と定義した。次に、クックはこの統一化へと向かう形而上学的解説と自然科学の解説を区別した。自然科学は結論に向かうことを指摘することしかできず、「科学言語の避けがたい不完全性」に妨げられて、「区別が明白な力の存在」⁶を示唆するにとどまる。また、W. B. カーペンターは『生理学の原則』において、「人間の現状において、人間は動物と何ら変わりはない…人間の理性の力は、種においてというより程度において、より下等な動物の力とは異なる」と述べたが、人間の「目に見えぬ存在を信じる…先天的な傾向」によって、人間と動物が区別されるということを示唆して、辛辣な見解を緩和した。カーペンターは次のように述べた。「この不死の魂により、人間はより高位の存在とつながり、その高位の存在において知性が存在する。その知性を行使する際に、知性は、人間の肉体に影響を及ぼす身体のメカニズムの不完全性により抑制されることはない。」⁷宗教を認めることは時には世論の力を認識するに過ぎないことでもあったが、それでもなお、宗教を認める

⁴ *Calendar of St Bartholomew's Hospital and College*, 1871, 42.

⁵ Thompson, 57.

⁶ J. P. Cooke, *Elements of Chemical Physics* (Boston, 1860), 9.

⁷ W. B. Carpenter, *Principles of Physiology* (1842), 54-5.

ことにより、これらの本は世界に関する統一した見解を示唆したのであった。このことは、ブリッジズにとって大変重要なこととなった。というのも、現象に関する説得力のある科学的説明を無視するしかない信仰を受け入れること、キリスト教を信じて育った人には「不可視の存在」を信じる「先天的な傾向」と思われることを封じること、そのどちらもブリッジズにはできなかったからである。

科学の躍進により宗教に対する疑念が湧いてくるためだけではなく、医学研修が革新的に変化していったため、医学生にとって、当時は刺激的ではあっても困難な時代であったに違いない。年配の医師たちは、長年、症状を目で見て知識を蓄積することにより意識せずとも病気を特定する、「顔相」の診断を用いることが多かった。これを使用する医学生は殆どいなかった。というのも、彼らは症状を表にして作成するヨーロッパ大陸的な診断に価値を見出したからである。ブリッジズは、広い視野と賞賛に値する独自の思想を持っていたので、「顔相」が人間の直感、つまり、利用に値する資質、を用いていると考えた。彼は、巧みな技術で有名な、パトリック・ブラック医師から技術を学ぶことにした。私たちが友人の手書きや外見を確認する際に、特定の特徴を引き合いに出さなくても、日常的に認識できるという方法は顔相と類似しているとブリッジズは後に説明した。⁸ さらに、彼は、表にした特徴からは特定することができないということさえ指摘した。ブリッジズは昔ながらの方法を評価することによって単に年配者の味方をしたのではないし、また彼らの技術だけに頼ったわけでもなかった。他の学生たちと同様に、彼は顕微鏡を用いた科学的な分析を評価し、科学的アプローチを学ぶのにも勤勉であった。

アプローチに賛否両論があった2つ目の分野は、特に外科における、殺菌消毒の実施だった。ブリ

ッジズは後に、病院の年配の外科医の1人が腹部の手術を行うのを見たことを回想した。

彼は極度の近視で、きっと彼にはよく見えていたのだろうが、手を使うのと同じくらい顔を使って作業をしているようだった—ウサギの穴で待ち伏せしている犬のように—彼は混乱して手探りしているだけのように見えた—そして、手術を終えると、彼は、内壁を縫い合わせる前だったのに、スポンジのくずで、さっとふき取ってきれいにしたつもりでいた。⁹

その外科医はバーソロミュー病院で最も不衛生な医師の1人だったが、患者の回復に関する統計によると、最も優れた医師であった。この統計により、リスターの理論の正当性が疑われた。有名なジェイムズ・パジェット卿のことを、外科においてよりも社会的名声において優れているとブリッジズは当然のように思っていたが、ブリッジズの記録によると、彼でさえ以下のように教えた。つまり、炎症と化膿は

自然による傷の治療の有益な手段であり、彼は（顕微鏡を使って）新しい血管の網状組織の絵を描いた。「自然」は膿の必要な炎症と分泌を促すために血管の網状組織を生み出し、また、増殖させるのである—外傷熱はお決まりのことだった…裂けた傷は熱い湿布で治療された—そして、私は（気候が暑い時に）蛆虫が湿布の下の肉芽で繁殖しているのを見たことを決して忘れない…

そのような外科の分野において、（消毒に関する医療行為が、ヒポクラテス学派が行ったものと同じくらい優れていたかどうかは疑わしい、¹⁰

⁸ Medical Lecture, fo. 5.

⁹ Ibid., fo. 2.

¹⁰ Ibid., fo. 3.

医師たちは優秀な解剖学者だったとブリッジズは付け加えているけれど、「冬の喜び」(1903年)には、パジェット卿との間に一線を画して、科学技術を用いることに気が進まないという気持ちが示されている。

無謀に攻撃を指揮して、武器の判断を誤り、彼は、(ああ、哀れな男よ、) 何と重苦しい策をめぐらせて自分を守ろうとしたのか…
単体、化合物、特効薬、化学治療学、
植物の汁、豪華なサレルノの薬草園で名づけられたものは何でも、マムシ、カタツムリ、あらゆる動物の汚物、信じがたいインチキ療法、悪人の野心に満ちた詐欺、緑の電流、
聖人の骨と神父の塗油。
愚か者たちよ！ 科学的で知的な彼の唯一の望みに逆らうとは！

殺菌の実施が認められるようになったのは、ブリッジズが聖バーソロミュー病院にいたときのことであった。

ブリッジズは、大英博物館から数区画離れた、病院の西側まで歩いてすぐのところにある、グレート・オーモンド通り35番地に住んでいた。その家に住んでいた別の住人はウィロウビー・ファーナーで、彼はブリッジズが医師の課程を終える数年前に、外科医としての医学研修を修了していた。ファーナーはブリッジズの親友で、バーソロミューで賞をもらったブライトンの最先端の外科医の息子であった。ロンドンで働いた後、ファーナーは1876年にブライトンに戻って、開業医の父の仕事を引き継ぎ、今度は自分がその地域の最先端の外科医となった。ブリッジズの親友になったもう一人の医学生は、ダーラム・スクールの校長の息子、ロンズデール・ホールデンだった。彼は後にオーストラリアに移住し、結婚してシドニーに長年定住した後、イングランドに戻った。偶然

にも、ブリッジズとファーナーとホールデンは皆、誕生日が同じだった。異なる場所に住み、異なる経歴を辿ったが、彼らの友情は後世まで続いたのだった。

ミュアーヘッドが1870年7月にイングランドに戻り、ブリッジズは7月22日に医学研修の期間が終わって8月から10月までフランスで過ごすつもりだったが、出発前にどうしても彼に会いたいと思った。ブリッジズはミュアーヘッドにロンドンを訪問するようせがむ手紙を書いた。

君が今週1日または来週の頭に数日間、町に来るなら一日曜、または、何曜日でも、僕の下宿に泊まってくれていいし、くつろいでくれ。君はずっと家にいたいかもしれないが、ロンドンには数時間で行けるし、すぐにロンドンで買い物したくなるはずだ。そして、僕は来週から海外に行くんだ—それに君が最後に訪問してから、ナショナル・ギャラリーは、とても多くの値打ちのある作品を収蔵しているんだよ。一午後の特急で来たらどうだい。心地良い夕食の時間。おしゃべり—遅くに帰って、ちゃんとした朝食を取る。必要なものを買いに行く。豪華にしつらえた特急に乗って帰り、また家で夕食を取ればいい—¹¹

ブリッジズが、その年の秋にフランスに行くことができたかどうか定かではない。パリに行ったのではないことは確かだ。プロシアに挑発され、フランスは7月19日に宣戦布告して、8月末にはパリは要塞化されていた。しかし、1884年に結婚する前に、ブリッジズはパリに行き、滞在中に、「ソルボンヌで文学と古典の講義」とコレージュ・ド・フランスの講義を受講し、「もちろん毎晩劇場」に通っていた。¹²

第2冬学期の医学課程は、解剖学、切開、生理学で構成され、最後に解剖学、生理学、化学、薬

¹¹ [1870年7月26日], BP, no. 97; LB, i. 111-12.

¹² ブリッジズからG. ロウズ・ディキンソンへの1892年1月19日の書簡, BP, no. 108; LB, i. 226. 1876年にブリッジズが医学研修の一環として行った訪問の際、彼は多忙のため文学の講義に出席できなかった。

学などの試験があった。だが、この大変なプログラムがブリッジズの精神をくじいたことはなかったようだ。彼はミュアーヘッドに次のように手紙を書いた。

アブラカダブラは、たくさん旅をした偉人だ…うやうやしい挨拶や預言者の名において、彼は前述のアブラカダブラ殿に、彼の心に浮かんだ以下の質問が、一度入ったら出られない暗闇の迷宮へと導くことを示唆する

- 1) アブラカダブラはどこにいる？
- 2) 彼は古の巨匠の展覧会に行ったことがあるのか？
- 3) もし彼が行ったことがないとしたら、彼はそれがどれほど良いかわかるのか？…書き手が正気かどうかという疑念が読み手の心に浮かんできたら、翼を借りて患者の安楽へと飛んで行くがよい—

夕方しか家にいないのは誰か。¹³

王立芸術院で行われた大巨匠展は、1871年1月に始まり、426の絵画が展示されたが、その大半は個人所蔵から提供された多数の有名な名作であった。

2月末にブリッジズはマーゲイトに行った。彼は二日酔いで、「堅い」作品は持ってきていたのだが、もっと軽い文学を読みたいと思って家主に本を貸して欲しいと頼んだ。その中には、ジョン・カミングの人気のある『大いなる試練—この世に来るものについて』があり、彼はその本について次のように述べた。

カミング博士は本当に弁が立つ—彼の本をじっくり読むと、人気があるのに納得するし、宗教教育において何よりもまず教わらないといけないことは、「文字」の正しい評価である—聖書の文章と、その輝かしい権威に対

する人々の盲目的な信仰なくして、カミングのナンセンスは通用しない。¹⁴

なぜブリッジズがこのように反応したのかは容易に理解できる。カミングは1848年から1867年の期間を、ヨハネの黙示録に描写されているように、大いなる試練の時とみなした。彼は、「1857年のリスボンの高熱から身体の健康の退廃まで、あらゆるタイプの病気」を、「7番目の黙示録の小瓶の影響が実現されたということ」(p. iv)に帰したが、そのような考えは、現行の科学的治療が提供する最善の方法で人間の身体の苦痛を和らげようとする英国国教会信者にとっては笑い種であった。

ブリッジズの義理の兄弟であるサミュエル・バトラーは、当時はそれほど正統な見解を有していなかっただろう。ブリッジズが最初にバトラーに出会ったのは1859年の初めだったが、その時バトラーは23歳で、モウルズワース博士のもとを訪ねていたことだった。この年にジョージ・ブリッジズはバトラーの妹のハリエットと結婚し、両家は頻繁に会っていた。バトラーはモウルズワース博士と宗教的信仰について議論する機会があった。なぜなら、バトラーは、彼が当時なりたいと考えていた職業の1つである聖職に就けるほど自分たちが正統ではないのではないかと不安に思っていたからだ。ブリッジズは後に次のように述べた。

私はサミュエル・バトラーが長い面接を受けた後、階段を上って私が巨大な水槽を設置しているところにやってきた時の、彼の表情をよく覚えている。私たちは少なくとも1日は湿地を散策し、私は彼のことをとても楽しく話ができる人だと思った—彼は明らかに私に彼の異端的考えを伝えないように注意されていた—そして、私たちはお互いに共感し合い、友情をはぐくんで別れた。¹⁵

¹³ 1871年1月30日, BP. no. 97; LB, i. 112-13.

¹⁴ ブリッジズからライオネル・ミュアーヘッドへの(1871年2月22日)の書簡, LB, i. 113.

彼らは1871年にバトラーがクリフォード・インの部屋に住むようになったときに再会した。ブリッジズは次のように記した。「私はバトラーを訪ねたが、一緒に食事したことはなかったし、彼がグレート・オーモンド通りの私の住居を訪ねてきた記憶がない。私は時々、午後遅くに出かけてバトラーと腰かけ、主に彼の新刊である『エレウオン』について話し、彼はその本の抜粋を私によく読んでくれたものだった。」バトラーがその本を出版する資金がないとわかり、ブリッジズは援助を申し出たが、その申し出は断られた。それは、バトラーが「良心の呵責なしに仲良く」なれる友人でいてくれと主張したからだ。ブリッジズは次のように語った。その友人関係は、「彼のダーウィンの本を通じて」続いた。「それら全ての本を彼は私に送り、私たちはそれらについてたくさん語り合った」。だが、ブリッジズがバトラーを「心が空っぽで醜く」、「人類に対する思考全般がお粗末」であり、彼の家族に対して悪意に満ちた態度をとっているとしようになったので、彼らは親友ではなくなった。それにも関わらず、ブリッジズも認めているように、バトラーは自分とは気質がとても異なる人に共感し、大変寛容になることができた。例えば、彼らの共通の友人である、W. S. ロックストロが乗合馬車から落ちて病院で瀕死の状態で寝ていた時のことである。バトラーは定期的にロックストロに送金し、誰かからの贈り物を受け取ることを彼が拒まないように自分の慈善を隠していたのだが、ブリッジズはバトラーのことを「金を分け与える余裕のあるとても嫌味な奴」と述べた。¹⁵ バトラーとブリッジズの間には、明らかな決別があったわけではない。彼らは会う時はいつでも友人として挨拶したし、大英博物館で会う時にはよく挨拶していた。また、出版した本についてお互いに手紙を書いた。そして、ブリッジズは

『エレウオン』を暖かい言葉で称賛し続け、推薦し、進化論の本を「最も優れた読み物」だと述べた。¹⁷

イースターの休暇中にブリッジズはマーロウ近郊のシーモア・コートに滞在した。シーモア・コートは、ビール会社に所属し、グレート・マーロウの議員である、彼の友人のオウエン・ウェザードの家だった。そこで、ブリッジズはミュアーヘッドに次のように語った。彼には「もっとも陽気な男にはありえないような、慎ましい親族がたくさんいて—私のようなとても短気な人間の期待を上回るほど彼らは優しくしてくれた」。ブリッジズはボートを漕いだり、アーチェリーを習ったり、散歩したり、「昼食を取ったり、ぶらぶら歩いたりして」、「生活習慣を変えるのにはとても良い」と思った。¹⁸

医学と外科の入門的な臨床指導を伴う病院実習において過ごした、聖バーソロミュー病院での夏学期の後、ブリッジズは数日間、南の海岸にあるシーフォードで休暇を取った。戸外で運動したいと思い、ブリッジズは友人に会うことを避け、ミュアーヘッドに次のように報告した。「水の豊富な場所に行った。初日に船に乗って、海水でびしょ濡れになった。2日目には25マイル歩いて、雨でびしょ濡れになった。3日目の今日は、浜辺で日光浴をした。そして、夕方の列車で帰宅した。」¹⁹ ブリッジズは定期的に運動するようになったことにより、「日曜日に田舎を散歩し、話し合うことを意図した、ロンドン市民のウォーキング・クラブのようなもの」と彼が描写した、「トランプス」（「徒歩旅行者」の意）に入会した。あるときブリッジズは畏敬の念を抱いていたレスリー・ステイブンと共に歩き、思考の速度を計る新しい機械について議論した。だがステイブンは、その機械を素晴らしいと思い、ブリッジズの否定的

¹⁵ Commonplace Book, fos. 59-60, Bridges Family Papers.

¹⁶ Ibid., fo. 60. キャリー・グローヴァーへの（1903年）8月22日の書簡, LB, i. 437-8も参照.

¹⁷ ブリッジズはライオネル・ミュアーヘッドへの1900年6月11日の書簡（BP, no. 99, fo. 48.）で、バトラーの*Life and Habit, Evolution Old and New*と*Unconscious Memory*を勧めた.

¹⁸ （1871年4月15日）、BP, no. 97; LB, i. 114.

¹⁹ （1871年7月18日）、BP, no. 97; LB, i. 114-15.

な考えを笑い飛ばしたため、ブリッジズは同じような経験を二度としたくないと思った。²⁰

1872年8月に、ホプキンはブリッジズに彼の「赤い手紙」なるものを送った。その手紙でホプキンは、労働者階級の過激な革命を許すと述べた。なぜなら彼らは大英帝国の富の増大に貢献したことに対して正当な報酬を受けるべきだったのに、受けていなかったからである。²¹ブリッジズは返答せず、ホプキンは彼の政治的見解に腹が立ったことを示唆した。このことはコミュニケーションの断絶を説明するものとして容認されているが、その不和はブリッジズがローハンプトンにホプキンを訪ねた1869年10月に始まったようである。ブリッジズがほぼ18カ月も手紙をよこさないで、ホプキンはその時「不親切にふるまった」に違いないと締めくくった。²²二人の間に起こったと思われることは、ホプキンはブリッジズの宗教的あるいは政治的見解に影響を与えようとして、明らかに彼を怒らせたということである。ブリッジズは1871年の手紙で、ホプキンは自分のことを悪く思っていると辛らつに述べた。ローハンプトンはイギリスで頂点にあり、5月のイングランドの新聞はパリ・コミュン一色だった。フランス革命と同じく、ローハンプトンはイギリスの政治的派閥により、偉大な民主主義の希望に満ちた象徴として、あるいは、恐ろしい警告としてみなされていた。ブリッジズとホプキンは初めて都会の貧困を目の当たりにしたが、社会主義が望ましい解決になるとは思わなかった点で両者の考えが一致した。ブリッジズはホプキンズより階級意識が強く、革命の思想を恐れていたが、そのような考えを述べることで意図的に仲たがいがいしたのではなかった。ホプキンのローマ・カトリック教会への改宗に伴い、ブリッジズはホプキンの意見というより、自分に対する態度を

おそらく気にしていたのであり、自分の生き方に関して不当に批判されたと感じていたのだろう。1888年までホプキンは医学生と医者へのストレスにまったく共感していなかった。²³逆に、ブリッジズはその時、正統的な宗教、特にカトリックのある要素に対して、明らかに懐疑的であった。ブリッジズは自分の手紙が、ホプキンの郵便物を検閲できる上層部の人たちによって読まれることにも異議を申し立て、ホプキンは遅い返事で、彼らはめったにそのようなことはしないと述べた。²⁴最終的に、友情の要となる互いの詩における関心は、まだはっきりしなかった。ブリッジズは決別しようと決意したというより、手紙に返事をするための優先順位を低くしたようである。なぜなら文通を続けたいという強い理由がなかったからだ。この二人のどちらかの返事が遅れるのは、それが最初でも、最後でもなかった。

1871年から1872年の間、ブリッジズの医学課程は、病院実習がさらに増えるとともに、冬学期の医学と外科の講義を組み合わせた内容となった。一方、夏学期には、病院実習と臨床の講義の他に、治療学、病理解剖学、および、外科手術が加えられた。実習のほとんどは、まだあまり洗練されたものではなかった。聖バーソロミュー病院におけるブリッジズの学友の1人であるジェームズ・ヴェルコは、局部麻酔なしの抜歯を初めて経験したことについて描写した。患者の頭を彼の腕の下に挟んで押さえつけ、彼は鉗子で一気にねじり取った。²⁵その日に行った8本の抜歯により彼は筋肉痛になった。

最終年次には、法医学、産科学、および、女性と子供の病気、ワクチン、目・耳・鼻の病気、そして、精神病について学ばなければならなかった。1870年代初期には、このような医学の分野のいくつかは膨大な知識が集積して細分化され、それに

²⁰ Commonplace Book, fos. 53, Bridges Family Papers.

²¹ 1871年8月2日, LI, 27-8.

²² 1871年8月2日, LI, 26-7.

²³ 1888年9月7日の書簡 (LI, 282) 「研修医でいるのはいいものじゃない。泥が炎に焼かれて割れるみたいな気分だ。」

²⁴ 1877年2月24日 (LI, 32)

²⁵ P. W. Verco, *Masons, Millers and Medicine: James Crabb Verco and his Sons* (Adelaide, n. d. [?1977]), 60. 以下、Vercoと記す。

ともなって聖バーソロミュー病院では別々の病棟が設立されたが、その中には耳科、皮膚科、および、整形外科があり、それぞれの科においてブリッジズは何か月か働いていた。ブリッジズは上級生として外来患者を担当する医師のために、「患者との面談記録」をしていた時の経験談を後に語り、スタッフ間の関係の形式遵守について意見を述べている。

外来患者担当の医師は、主に救急病棟から帰ってきた患者の診療を朝に行う…そして彼は二つのテーブルがある部屋で座る。医師と患者が1つのテーブルに、もう1つには「面談記録者」、つまり、上級生で、(患者とは無関係に)患者に同席するが、患者を見た後、彼の上の者に回して認可や修正が行われる。私はジョーンズ医師(それは彼の名前ではなかったが)の面談記録をしていた。彼は素晴らしい人で、オックスフォード卒の地方紳士であり、医師として最高の名誉を誇ることとなった。準男爵で医師のカレッジのメンバーであるジョーンズ医師は今も存命で、私の大先輩である。今回、ジョーンズ医師は、患者が彼に治療を求めた腫れ上がった手について何が問題なのかを授業で教えるのに困っており、彼は痛風とリュウマチについて学生に話していた。その患者は大きくて体重が重く、35歳から40歳ぐらいのたくましい男性だった。ジョーンズ医師には、いつもお決まりの儀礼的パターンがあり、彼はなぜだか「ブリッジズ医師に聞いてみよう」と言っていた。そうして、彼は患者に部屋を歩かせて私のところにやってこさせた。「この手はどうなっているんだい、ブリッジズ」と言って、その男性は私の方に向かって手を広げてみせた。その手に触ったり検査したりすることなく、私は言った。「彼は第三中手骨が折れています、ジョ

ーンズ先生」—そして、その男性には、「顔を殴ったのですか?」と聞いた。男性が微笑むとジョーンズ医師は言った。「彼の第三中手骨が折れているというのかね?よし、彼を外科医のところに連れていこう」。そうして彼は、その後、外科医が対応する外科の診療を行う次の部屋に男性を歩いて行かせ、数分後に戻ってくると言った。「君の言う通りだよ、ブリッジズ、ラングトンは第三中手骨の損傷だと言っている」…だが、どうやって私はそれがわかったのだろうか?私が12歳の学生だった頃、学校の友達が喧嘩をして、このような事故が起こり、彼の手がこんな見かけだったし、その怪我の変わった性質が私の心に永久に刻み付けられたのだ。²⁶

この場合、ブリッジズの視覚的な記憶が大変役に立ったが、学生が覚えることを期待され課題として提出しないといけない情報量は一個人の手に負えないものになってきていた。このことは、まだ当時は実感されておらず、それはブリッジズ、および、他の医学生たちのキャリアに多大な影響を与えることとなった。

1871年から1872年の間にブリッジズはマドックス通り50番地に引っ越し、画家で音楽家のハリー・エリス・ウールドリッジと家をシェアした。その家はロンドンの中心にあり、オックスフォード・サーカスから数区画南のハノーバー広場の傍にあった。ブリッジズはウールドリッジのことを「私の青年期に一番仲の良かった親友」と描写した。彼は「体格がよく、がっしりしていて、胸板が厚く、若禿で目立っているが気品のある頭、大きな青い目、健康で筋骨たくましい肉体を持ち、フランス人のように整えられた赤褐色の口髭をたくわえていた。」²⁷ブリッジズは彼について次のように述べている。「衣服やマナーにおいて堅苦し

²⁶ Medical Lecture, fos. 17-20.

²⁷ 'Harry Ellis Wooldridge', *DNB*, 1912-21 (1927), 594-5. ブリッジズからマーガレット・ウッズへの [1915年] 7月23日 (LB, ii. 678) の書簡.

く、性格は勇敢で寛大、哲学的信念や厳格な倫理観を持つ彼は、優しい心の持ち主で、他者に寛大であり、たわいのない会話を楽しんで愛想がよいが、言い訳は許さない、特に芸術家同士の会話においては、そのような人たちにとって、彼のごつくばらんなユーモアや痛烈な皮肉は不快なものであった。彼は「話術に富み、ものまね上手で、笑い声が大きかった」が、このような性質全てをブリッジズは愉しんでいた。ブリッジズより1歳年下のウールドリッジは、裕福な家庭の出身ではなかった。彼の父はスミス・エルダーという出版社で「文筆業」を営んでいたが、ビジネスに失敗した。彼は息子をロイド銀行に年季契約で働かせたが、ブリッジズに出会った頃にはウールドリッジは銀行を辞めて、王立芸術院学校に通っていた。彼はバーンジョーンズの影響を受けて絵を描き、バーンジョーンズは彼の長きにわたる友人となった。夫の『回顧録』においてジョージアナ・バーンジョーンズは、1860年代にウールドリッジが家族に次のようなものを紹介してくれたと記録している。

17世紀のイタリアの歌の新しく美しい世界—そして彼の歌うカリッシミとストラデッラの歌に私たちはうっとりとした…こういった宝物のほとんどをウールドリッジ氏は自分で大英博物館の草稿から見つけ出したのだが、その他の歌は彼が後にボドリアン図書館やクライスト・チャーチの図書館、および、ローマから持ち帰ったものだった。²⁸

ウールドリッジはブリッジズの古典の指導を受けなかったが、フランス語とイタリア語を流暢に話した。「若い頃から彼は卓越した歌手で、今や専門的な対位法の作曲家になり、W. R. ロックストロにパレストリーナの対位法を習って、バトラーとブリッジズをロックストロに紹介した。」ロック

ストロは教会のオルガン奏者で、『グローヴ辞典』の単旋律聖歌の項目のほとんどを彼が執筆し、モーツァルトのオペラを編纂したが、ブリッジズによると、「卓越した知性」を持ち、「素晴らしい人格の持ち主で、彼は本来かなりそのような性格ではあったが、意識的にそのように振舞っていた」。ロックストロの「気高い礼儀正しさ」や「繊細で優しい性格」をブリッジズは好み、二人の友情はロックストロの生涯にわたり続いた。²⁹

ブリッジズには他にも芸術家の友人たちがいた。その中には作曲家のジョン・ストレイナーがおり、ブリッジズより4歳年上の彼は、ブリッジズが学部生の頃はオックスフォード大学のオルガン奏者で、BHTのフェローであった。ホプキンズは1880年に『ハーモニーの理論』に関するストレイナーの教本を入手し、彼が執心していた音色の伴奏を書けるようになりたいと思ったが、それは明らかに困難なことであった。1876年にストレイナーの『入門書』が印刷され、ホプキンズは1884年にそれを入手したが、ブリッジズに次のように手紙を書いた。

ストレイナーはハーモニーに関する見事な論文を書き、それに対して私のように無知な人々は心から感謝しているし（彼の『新入門書』は同じとは言えないが）、無知でない人たちもきっと感謝しているだろう。例えば、パーセル、ヘンデル、バッハに精通した、この街（ダブリン）の音楽家であるロバート・スチュワート卿は、彼がこれまでに見た中でもっとも科学的な論文だと述べている。彼の論文はこれで終わりではないが、大きな前進であり、意識を覚醒するものだ。ストレイナーは実際に会ってもきっと素敵の人だと思う。³⁰

ホプキンズは後にブリッジズを説得して、これ以上改良できないと思った楽曲をストレイナーに渡

²⁸ *Memorials of Edward Burne-Jones* (1906), i. 302.

²⁹ Robert Bridges, *Commonplace Book*, fos. 60-3, Bridges Family Papers.

³⁰ 1884年11月11日 (LI, 199)

してくれるよう試み、自分達がオックスフォードに同時代に存在して彼を見かけたことがあるので彼に惹きつけられていると説明しているが、ブリッジズは、彼がイトンで知り合った、おそらくヒューバート・ペリーという別の友人を紹介することを仄めかした。³¹ブリッジズは、特にストレイナーが1874年の暮れにセント・ポールに引っ越した後、友人たちと一緒に音楽を作曲して幾晩も過ごし、多くのコンサートに行った。例えば、1873年11月にアルバート・ホールで行われたヘンデルの「テオドラ」に心酔した。³²彼もまた音楽作品を何曲か作曲したのだろう。ホプキンズは、ロバート（ブリッジズ）が家族と過ごしたある夕べについて次のように述べた。

あの晩（彼の音楽仲間の妹）グレイスは当惑しておかしくなったに違いない。君は彼女が巨匠の音楽だけが好きだと思い、彼女も君がそうだと思っている。彼女がヘンデルをこよなく愛しているのは間違いない。彼女はおそらく君に批評されるのを恐れているだろう。

私は彼女に君の賛歌を送った。私がそう言うと彼女はそれを見たいと言った。彼女はそれがオリジナルには聴こえないが、素敵な曲だと言った。私が彼女の批判について述べたと知ったら彼女はうれしくないだろう。³³

1872年にブリッジズがサヴィル・クラブに入会した時、彼の友人サークルは、さらに広がった。サヴィル・クラブは1868年に結成され、さまざまな経歴の中産階級の男性たちが出会える様に意図した会であった。³⁴会費は意図的に安く設定され、他のほとんどのロンドンのクラブのように、小さなテーブルでレストランのサービスを受けるとい

うより、一同に会して会員たちが座って夕食を共にすることにより、交流が深まった。ブリッジズは1872年から1907年まで会員で、その後、1915年に再任された。彼はバジル・チャンプニー、トマス・ファウラー教授、エドモンド・ゴス、チャールズ・キーガン・ポールとともに1879年から3年間委員を務めた。彼の最初の会員時代にサヴィルに所属していた友人・知人の中には、マンデル・クレイトン、ヘンリー・ウッズ、アンドリュウ・ラング、ウールドリッジ、アルフレッド・ウォーターハウス、ミュアーヘッド、フィリップ・ラスボン、コヴェントリー・パトモア、ジョージ・セイントベリーがいた。文芸界のこのような友人たちの影響により、ブリッジズはさらに真剣に書くことに興味を持つようになったことだろう。

ブリッジズの最初の詩集は1873年に出版された。その本は美しく装飾された見出しが添えられて優美に印刷され、ウールドリッジに捧げられた。表題で詩人は「ロバート・ブリッジズ、オックスフォード大学学士」と記され、目次は、題目で分類された部分と、ソネット、ロンド、そして当時流行した2様押韻の8行詩のような詩形で分類された部分があったが、それは自分が作詞できる詩形の幅を見せ付けたいと思う、1人の若者の作品であることを示唆した。53の詩のうち5作品が1868年か1869年に創作されたが、残りのほとんど全てが1872年と1873年の夏に書かれ、そのうちの多くが1873年8月のシーフォードでの2週間の休暇中に書かれたものである。³⁵その詩集の18篇だけが『詩集』（1951年）に見られるが、それはブリッジズの詩における進展を示すように編集されておらず、大幅に削除することで彼の人格がほとんど分からなくなっている。例えば、1873年版で取り組

³¹ 1883年4月5日 (LI, 178-9); 1885年1月1日 (LI, 204)

³² ブリッジズから母への1873年11月6日と10月2日の書簡, Bridges Family Papers; ブリッジズからライオネル・ミュアーヘッドへの1874年6月19日の書簡, BP, no. 97; LB, i. 118.

³³ 1879年10月22日 (LI, 98)

³⁴ *The Savile Club 1868-1924* (1923年に、そのクラブの委員会のために私費出版されたもの)

³⁵ Guerard, App. C, 293-5.

んだ主題には、たいていの彼の作品から連想されるエレジーや自然描写とともに、「哲学的」と分類される2篇の詩と何篇かのバラッドが含まれていた。哲学的詩のひとつである「死刑」では、至極冷静な配慮で主題を扱い、彼の義弟が殺人の罪で絞首刑にされた1868年の後に、彼が連想したに違いないことが書かれている。ブリッジズはある死刑宣告された人物の最期の夜を描写している—the Plowsを襲撃した男のことではないのは明らかだ—そして、永劫の罰の方が死刑よりもさらにぞっとさせるものではないだろうかという疑問を読者に与えている。それは永劫の罰を忌み嫌う、現存する初期の表現で、ブリッジズの宗教的信念を決定付ける要素であった。

それは不可抗力のようだ
とてもゆっくりと彼を罪へと駆り立てた
彼は良心の呵責をすぐには回復できず、

いまや、天罰が、長い眠りから覚めて、
満を持して彼に出会った、
最期の罪に罪で報いるために。

彼の刑罰は彼の過失にととてもよく似ていて、
彼の罪の恐ろしさをしっかりとらえ
結びつくようだ…

そして、1度の激痛で
頭と体が2つに分かれる、
体と魂が、一再び1つになることは
あるのか？

彼にはわからないし、彼の過去は
彼の望むものではない—
その死に至らしめる一撃で
全ては無に帰すか溢れ出すかだ。

この世のどんな悲しみや痛みも
彼の心と存在を揺るがせはしない、

あの世の古の恐怖ほどには、

「幸福」のような、その詩集の中のその他の多くの重々しい詩は、高潔な人生、自己鍛錬、判断力の自立性を厳格に追い求める主題を扱う一方で、愛の義務を捨てることに対する警告も見られるが、それは、おそらく医学生としての彼のストレスに満ちた人生を示唆している。

1873年の詩集は不規則なリズムや陳腐な詩句が見られるにもかかわらず、読者の注目を集めるに十分な物語性を表している。『詩集』(Poetical Works)には、「叫ぶ湖」とワーズワース的な「村人」という二つのバラッドが含まれているが、1873年の『詩集』(Poems)には、ゾピラスとバビロンの包囲、行方不明の息子を探すフランス人女性、大修道院長の祭礼に忍び込む20人の自称強盗たちといった、さまざまな主題を扱う4つのバラッドと「ロマンス」、そして、不運な恋についての感傷的な物語「二つの指輪」がある。ブリッジズがこのような物語詩をこれ以上書かなかった理由は、ワーズワースが書いた数多くの詩が有名であることによるもので、ブリッジズはワーズワースを安直に真似ていたことを自覚していたからである。後に、ブリッジズは自分だけの物語の様式、つまり、歯切れのよい逸話的な詩を発展させることになり、友人たちの思い出について書くことで自分自身のスタイルを確立したのであった。

詩集の何篇かの抒情詩は急いで書いたような形跡が見られる—例えば、「少年と少女」では度々行数が水増しされ、*trough* (思う) や *mayhap* (偶然に) のような古語が適切な語の組み合わせではないのに使用されており、「誘惑」のような幾篇かの詩は駄作と言ってもよいだろう。他方、2様押韻8行詩の「初めて会ったときには思いもよらなかった」では、説得力のある厳格な形式があり、1880年に『マクミラン誌』の書評でフランシス・ヒュファーは、その詩が「この類の詩の中では完璧である」と述べた。³⁶ また、3つの2様押韻10行詩にも同じく厳格な形式が見られる。「君を放さない」という

³⁶ Vol. 43 (Nov. 1880), 51.

詩はリフレインによって確立された期待を見事に裏切り、「日はまだ暮れぬ」という詩でも同様にエンディングで巧みな反転が見られる。

日はまだ暮れぬ、
だが 夕暮れには愛する人のいる家に帰ろう
…

彼女は階段で待っているのではない、—
彼女は私の寝室に腰かけそこで私を
待っている…

そして 彼女は私をいつもの場所に
連れて行く
彼女の傍らに、そして 私は彼女の愛らしい
顔を見つめる。

そこに私が座ると、彼女の頭から後ろに
彼女の髪がすくと暗闇に落ちる。

私の疲れた目は痛くて熱い、
彼女は何を差し置いても私に会いたかった人
…

そして 私は毎晩ここに腰かけ、
一息つき 愛の喜びを享受する。

だが ドアをノックする音、
階段を上ってくる音に驚いて、
ああ、愛する人は椅子から立ち上がる…

そして 客人は思う、彼女の玉座を
奪ってしまったんじゃないかと、
そして 私は そこに ただ
ぼつんと座ったまま。

愛する人が誰なのかはわかっていない。おそらく、彼女は、その本に所収されている2つのエレジーの内の1つで描写された女性と同じ人物かもしれない。これは円環状の経験を表している。「森は丸裸」に始まるこの作品は、時折、倒置や明らかな

頭韻によって注意がそらされるが、美しい詩である。ハーディの何篇かの詩と同様に、わびしい冬が、恋人と彼の愛する人の幽霊の逢瀬の背景として用いられている。最も優れた連においては、悲しみが亡き女性への捧げ物となる。

森は丸裸 川の霧が木々に浸み込んでいる
冬の寒さが命を奪った木々に、
こわばった枝だけが静寂を破る、
落ち葉を嘆いて…

というも この小道に、あらゆる角に、
彼女の姿の幻影が私には見えるからだ
だが 嘆く者のゆっくりとした歩みに
合わせて彼女は歩き、
私の声や呼びかけは彼女には聞こえない。

私の心に感情の道が渦巻いている、
思い出の道、それは全て彼女のもの
何のために彼女の幻影はひそかに
悲しい場所にだけ現れるのだろうか。

ブリッジズは後に最後から2行目のfigure (姿) という語を beauty に変更した。

「哀れな萎れた薔薇」という抒情詩で、ブリッジズはスプリング・リズムの実験をしたが、それはホプキンスが「聖ドロテアの絵に寄せて」で用いたリズムである。ブリッジズは後に韻律によって雰囲気を生み出す助けとなる可能性を模索することになるが、この初期の詩においてさえ、二つの主要な特徴を理解したことを示している。つまり、彼は「過去の喜び」において二つの強勢を隣接させ、「薔薇の骨」でいくつかの強勢のない音節を並べるといふ自由を明らかに試みた。イエイツは後に「私はムネアカヒワが求愛する声を聞いた」に適切な賛辞を送った。その詩では各連が不均等な短い行で終わることにより、少しいたずらっぽい感じがする洗練されたリズムを生み出している。³⁷ イエイツはこの詩集を基にして最終的にブリッジズを評価した。『オックスフォード近代詩選』の序章で彼は次のように書いた。

ブリッジズの影響—理論だけでなく、実践は決して弱まっていなかった。彼は抒情詩に、新しい韻律、ホイッスラーの絵のように意図的な区分け、ランダーの幾篇かの詩のように意識的に形成した衝動を与えたが、血においてというより、神経において異なり、人間的というより、鳥のようである。速度を速めたり遅くしたりして、しばしばありきたりになる言葉が忘れがたいものになっている。

喜びのきらめき
そして 真っ暗な墓、

あるいは、簡素な表現、若者の衝動的な表現ではなく年配者による簡素な言葉の選択であり、多くの刺激的な言葉が実験されては排除されている。

私はムネアカヒワが求愛する声を聞いた
春に 彼の貴婦人に！
彼のつがいは遊んでいて、
じっと彼の歌を聴きやしない
彼の愛の歌を。—私の言葉は
彼のやさしい愛を
間違って伝えないだろうか。

全てのメタファー、全てのありふれた考え、
空虚な言葉だらけ
だが、全てがすばらしい。

(pp. xvii-xviii)

これは賛辞の表現ではあるが、1936年に出版されたことを考えると、幾分皮肉なお世辞である。例えば、「年配者による簡素な言葉」という表現は、明言せずとも、ブリッジズの晩年の詩であることを示唆しているが、1869年に書かれたその詩は、現存する彼の詩の中では最初期の作品の1つであ

る。「海に浮かぶ島」のような同時期の若く軽い詩でイエイツを「要約する」こともまた適切ではない。ブリッジズは「私はムネアカヒワが求愛する声を聞いた」よりもっと重厚で巧みな技巧を用いた詩を出版し、それは『詩集』（1873年）にも収録されているが、イエイツは彼の晩年の詩を読んでいないし、もともとは1897年に書いた書評のこの部分を後の評価に含めたことは、正当に彼を評価したことにはならなかった。

最初、ブリッジズは本を無料で送ることで注目を集めようとしたが、いらぬものが含まれていたと言って、後に売れなかった本を処分した。³⁸ 1880年の第二版は46篇のうち19篇の詩だけを収録する予定だった。アンドリュー・ラングが書いたその詩集の書評は1874年1月出版の『アカデミー』誌に掲載された。彼はロマン派的な「ある貴婦人のエレジー」を賞賛し、次のように締めくくった。「この詩には奇妙な空想が見られ、常に繊細な驚きの力、簡潔な言葉、優美さ、感情、洗練された音の響きがある—これらの要素がブリッジズ氏の性質である。彼の欠点はモデルを古めかしくして粗雑に描写しているところだ…数篇の作品ではユーモアを見せようとして失敗していると思う。」ホプキンズはその書評を見て、初めてブリッジズが詩作に興味があることを知った。彼は、文通が途絶えることに反対して、手紙を書いたが、ブリッジズは国外にいて、帰国し、ホプキンズをマドックス通りの自宅に招待しようと返信したときには、イエズス会は北ウェールズに移転してしまっていた。

1873年のクリスマスの直後、ブリッジズは、治療学、医学、外科、助産学、法医学、衛生学の最終試験を受けるためにオックスフォードに行かなければならなかった。それは1週間の記述試験と口頭試験、臨床試験で構成されていた。彼は記述試験を落とし、それゆえに試験全部が不合格となっ

³⁷ W. B. Yeats, 'Living Poets. IV, Mr Robert Bridges', in *Bookman* (1897年1月),

Richard J. Finneran 編, *The Correspondence of Robert Bridges and W. B. Yeats* (1977) において再版。以下、Finneran として引用する。

³⁸ ブリッジズから母への1874年10月18日の書簡, Bridges Family Papers.

た。その主な理由は、ブリッジズの回答があまりにも短すぎると考えられたことによるものである。³⁹ このことは大きな打撃であったが、このために彼は予定していたイタリア旅行の期間を長くしたのかもしれない。ブリッジズは、ミュアーヘッド、そして、リヴァプール商業会館社長であり、何よりロセッティの絵画をウォーカー・ギャラリーのコレクションとして寄贈した芸術作品収集家である、フィリップ・ラスボンと一緒に旅をした。ラスボンはブリッジズが当時入会した芸術サークルでは有名であった。ラスボン夫人と夫妻の娘、そして、夫人の友人も同行し、ワールドリッジも十分な資金を稼いだら参加するつもりだった。1874年1月に彼らは列車でニースに行き、そこから馬車でジェノアに行き、また列車に乗ってピサに行った。⁴⁰ ラスボン家はロバートやライオネルと一緒に旅行をして期待していたより明らかに楽しいとわかり、散策をして若者たちをわくわくさせ、ローマに直行するより彼らと一緒にもっと楽しい旅をすることにした。彼らは3日間シエナで過ごし、一日をオリヴィエート散策に費やし、その後、フィレンツェで列車に乗ってローマに行った。

ラスボン家はブリッジズやミュアーヘッドと違うホテルを予約していたが、彼らは頻繁に会い、月末には3日間約40マイルを一緒に馬車で旅行した。ブリッジズはローマについて複雑な気持ちだった一喜びや憧れと同時に、いら立ちもあった。午前11時までは部屋にいて、午後にはさすがしい夏の散策を楽しみ、カフェで食事をして6時まで帰らなかったが、週に2回は午後に1時間イタリア語のレッスンを受けていた。彼はイタリア語を学ぶのを楽しみにしており、2月の終わりには読書できるようになりたいと思っていた。ブリッジズは当時1日1時間は勉強しようとしたが、他にしなければならないことがたくさんあったので、進度がそれほど早くないことを告白した。彼が注目

していたことの1つはイタリア芸術について学ぶことだった。ミュアーヘッドの豊富な知識に助けられてブリッジズはイタリア芸術を学び、ヴァチカン美術館に午後に何日も通ったのであるが、彼はイタリア芸術においては宝が「無尽蔵」⁴¹にあると述べた。2月に、母の送金のおかげで、彼は元気で健康な馬を借りて、毎日乗馬の練習を楽しんだ。そのおかげで裕福なラスボン家と団体の小旅行に行くこともできたのであった。

ワールドリッジが3月に合流し、彼とミュアーヘッドは毎日スケッチと絵画にいそしみ始めた。イースターの前にラスボン家はまっすぐ帰国したが、ブリッジズとミュアーヘッドはイースターに最初の数日間はナポリに行き、その後、北のフィレンツェへ向かった。ブリッジズはフィレンツェを好み、本屋で拾い読みし、ボッカチオの作品集と16世紀のペトラルカの本を購入した。彼はペトラルカの本をその後すぐに紛失してしまったが、ミュアーヘッドがその後訪問した際に奇跡的にその本を取り戻した。ボローニャで、ブリッジズは観光に割く時間を短くすることに決めた。5ヶ月間かけて新しい物を見て回った彼は、「これ以上プラムプディングを食べたくない」と母に伝えた。ワールドリッジとミュアーヘッドはヴェニスとラヴェンナに行きたがったが、ブリッジズは、同行したい気持ちはあったものの、彼らを置いて、6月初旬に列車で帰ってしまった。他の二人もその後すぐに戻ったのであるが、ブリッジズはミュアーヘッドに次のように手紙を書いた。

私は明日北に行くということを伝えるために君に手紙を書いている。それで、もし君がロッチデイル近郊にいるなら私に会いに来れるだろう。クリケットができるし、きっと楽しいだろう。君も楽しんでくれたらいいのだが、もしお気に召さなければ、僕がプレーしてい

³⁹ Edward Bridges, Notes to 'Letters of Robert Bridges to his Mother', fo. 6, Bridges Family Papers.

⁴⁰ ブリッジズからライオネル・ミュアーヘッドへの（1874年1月）の書簡（BP, no. 97; LB, i. 116-17.）

⁴¹ ブリッジズから彼の母への（1874年1月28日、1月31日、2月3日、3月24日）の書簡、Bridges Family Papers.

る時に、よかったらモウルズワース博士の原稿を読んでくれてもいい。彼はまさに神だよー説教はあまり面白くないが、ほとんど判読できないから、あまり退屈することはないだろう。ウールドリッジと僕は、ここでとてもくつろいでいる…僕の買ったボッカチオの本は明らかに海賊版だ。イタリアの本だが、それでもよい本ではある。その版は、フランスの文字表記で模写した題がついていて、ロンドンでも再版されていると思う。まんまと引っかけたよ。だが、その本はイングランドの市場で買っていいぐらいの価値はある…僕は君のフリプールの絵を壁からはずして、ナイル川の絵を飾った。メレディス・ブラウンは、先日、ナイル川の絵の方を逆さまにしてもいいんじゃないかと言っていた。私は今日ストレイナーに会ったが彼はとても元気だ。来週彼の家で夕方に行われる音楽会には参加できない。ヴァイオリン四重奏を演奏するらしいが、私は北に行くことになっている。本当に残念だよ。

ウールドリッジが楽譜を書いてこのペンを使い切らなかつたらよかったのだが、彼はインクを使い切ってしまったので、私はこの手紙が読めるか不安だ。そのことはそんなにたいしたことではないがね。ウールドリッジはラスボン家に旅の思い出について丁寧な手紙を書き、約束していたマンチェスターへの訪問をする時間があれば、彼はラスボン家を訪ねたいと言っている。そして、1週間後ぐらいに私がリヴァプールの美術館にあるロセッティの絵画コレクションを見られるように彼がアレンジできるかどうか私からラスボン家に聞いて欲しいとのことだ。その流れでロッチデイル牧師館に立ち寄るのも「いいだろ

う」－10日後には町に戻らないといけない。クリケットのことを覚えておいてくれ。⁴²

ホプキンは当時リヴァプールで働いており、ブリッジズは、彼がロセッティの絵画が見たいと知っていたので、フィリップ・ラスボンにホプキンを誘ったら喜ぶだろうと述べた手紙を書いたが、返事はすぐに来なかったようだ。⁴³

1874年7月下旬にブリッジズはダブリンに行き、そこで約1ヶ月間、「薬と外科」の方法について学んだ。「こんなに多くの医師に会ったのは初めてだった」と彼は断言した。「その場所全体が治療の技術に捧げられている」。彼は「街の最もよい場所にすばらしい家」を持ち、イングランドに帰る前にその国の何かを見ておこうと思ったが、ダブリンが「とても退屈な場所」だと思った。それはホプキンズがその10年後に思ったことと全く同じであった。⁴⁴ 奇妙なことに、ホプキンは彼の訪問について知らなかったようだ。彼はブリッジズへの手紙で、一度も行ったことのない人に伝えるかのようにダブリンについて説明した。

ブリッジズは12月に再試験を受験することになっていたが、試験に合格するまで通常の医療業務に従事できないという苛立ちを10月には露にしていた。彼は数名の友人たちと家を共有したかったが、そのための資金がなかった。ブリッジズは貧しい訳ではなかったが、とりたてて裕福というわけでもなかった。ウィロウビー・ファーナーがマドックス通りのブリッジズの部屋を譲り受けて家賃の3分の2を支払ったので、ブリッジズはイタリアに行くことができた。母の援助もあって、ブリッジズは中東とイタリアへの旅行に関してとても慎重に勘定を整理していた。彼は家を見つけ、ウールドリッジとファーナーとともに共有したいと思い、モウルズワース博士に賃貸契約費と手数料を援助する投機的事業として関心がないか尋ねて

⁴² 1874年6月19日, MS Eng poet. c 22, Bodleian Library; LB, i. 117-18.

⁴³ ホプキンズからブリッジズへの1879年10月22日と1880年3月23日の書簡 (LI, 97, 100) は、ブリッジズが何度も彼を招待しようとしていたことを示唆している。

⁴⁴ ブリッジズから母への1874年6月29日の書簡, Bridges Family Papers.

みたが、ファーナーの予定が定まらなかったもので、その案はお蔵入りとなった。⁴⁵ブリッジズは冬の間ずっと病院に住むことができればいいのと思った。

12月初旬にブリッジズは医学試験のためにオックスフォードに来るように言われたが、その後アクランド医師が犬に噛まれたために試験を延期するよう頼まれた。ただ一人の受験者だったブリッジズは、これに引き下がらず4日間で4人の医師の試験を受けた。熱があったにもかかわらず、彼は手ごたえを感じた。そして、今回は合格し、翌週に学位を授与された（1874年12月17日）。⁴⁶

謝辞

翻訳に際して、ケンブリッジ大学のフェローである著者 Catherine Phillips 博士の許可を得て、*Robert Bridges: A Biography* (Oxford University Press, 1992) の第5章を日本語にした。2013年度と2014年度に「G. M. ホプキンズの空想について」という課題で日本学術振興会科学研究費に採択された際、私は2014年にこの研究の一環で客員研究員としてケンブリッジ大学に滞在し、19世紀イギリスの詩人である G. M. ホプキンズの研究で著名なフィリップス博士に、資料提供や研究に対する貴重な助言をいただいた。ロバート・ブリッジズはホプキンズの友人である詩人だが、医師でもあった。フィリップス博士は、この著書で従来ほとんど注目されていなかったブリッジズの医師としての側面について、詳細に調査している。2019年にケンブリッジ大学に再び客員研究員として滞在した際、ブリッジズについて博士にお話を伺うことができた。

19世紀イギリスにおいて、化学者として有名なハンフリー・デイヴィーが詩人でもあったということや、英文学と医療・科学との関連に近年関心

があり、国内外の英文学・文化研究においても医療など他分野との関連に注目が寄せられているので、今回、フィリップス博士のご著書から医師としてのブリッジズのバイオグラフィーについて述べられた個所である第5章を翻訳させていただくことになった。今後、「医師としてのロバート・ブリッジズ (2)」として、第6章も翻訳したいと考えている。

以下のブリッジズについての紹介は、『ブリタニカ国際大百科事典』を参照した。

Robert Bridges (1844-1930)

オックスフォードシャー生まれ。イギリスの詩人、批評家。韻律の技巧にすぐれ、言葉の音楽美に細心の注意を払った。『短詩集』*Shorter Poems* (5巻, 1890~94), 『新詩集』*New Poems* (1929), 長詩『美の遺言』*The Testament of Beauty* (29) などが代表作。また『ミルトンの詩法』*Milton's Prosody* (1893), 『ジョン・キーツ』*John Keats* (95) など多くのすぐれた評論を書いた。G.M. ホプキンズの友人で、彼との往復書簡集も重要。また英語の改良を目指した「純粋英語協会」を創設した。1913年桂冠詩人。

このように、ブリッジズは一般的に詩人として認知されており、『ブリタニカ国際大百科事典』においても彼の医師としての側面には触れられていない。そういった意味でも、フィリップス博士のご著書はブリッジズの医師としての経歴もつぶさに調査している点で、文学研究にとどまらず、文学と医療・科学など他分野との関連に焦点を当てる近年のイギリス文学・文化研究の動向に先駆ける研究であると同時に、19世紀イギリスの医療についての研究にとっても貴重な資料となる名著である。

⁴⁵ ブリッジズから母への（1874年10月2, 18, 24日）書簡, Bridges Family Papers.

⁴⁶ ブリッジズから母への（1874年12月）の書簡, Bridges Family Papers.